

モダン着物の流行と着装・作法の変容  
—服飾博物館収蔵品の事例を中心に—

Modernization of Kimono and its Wearing Manners from 1910s to 1930s in Japan  
—Focusing on the Bunka Gakuen Costume Museum's Collections

山田 晃子\*<sup>1+</sup>, 小山 有子\*<sup>2+</sup>, 半田 幸子\*<sup>3+</sup>  
Akiko Yamada\*<sup>1+</sup>, Yuko Koyama\*<sup>2+</sup>, Sachiko Handa\*<sup>3+</sup>

\*1 大阪大学大学院文学研究科 大阪府豊中市待兼山町 1-5

Graduate School of Letters, Osaka University,  
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, Japan

\*2 大阪大学日本語日本文化教育センター  
Center for Japanese Language and Culture, Osaka University

\*3 東北大学大学院国際文化研究科  
Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University  
+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture  
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: During the 1920s and 1930s, Japan experienced the phenomenon of kimono Westernization or modernization. Drawing on the study of actual kimono examples with modernized patterns which were made in 1920s and 1930s Japan and stored in Japanese and British museums, as well as magazine records and the archives of department stores such as Mitsukoshi, the project explored this little-known aspect of Japanese kimono history. Each researcher explored the following points: ①The mutual influence of Japanese and Western design on kimonos. ②How Japanese women's magazines, such as *Fujin Club* and *Fujokai*, introduced the new trend in 'traditional' kimonos; how women in Japan received the development and adopted the different standards of beauty regarding kimonos. ③How department stores offered the different styles to the general public.

要旨: 大正から昭和初期にかけて、日本では着物の「洋風化」「モダン化」と呼べる現象が起こった。本研究は、この現象を手がかりとして、着物文化の一側面を明らかにしようとするものである。まず、着物の柄をめぐる東西のデザインの交流がどのようなものであったのか、現在国内外の美術館・博物館で所蔵されている、大正・昭和期の日本で製作されたモダンな柄の着物の現物を調査することで明らかにした。さらに、婦人雑誌メディアはその新しい潮流をどう紹介し、日本の着用者は、そのようなこれまでとは異なる着物の美をいかに受容したかについて、『婦人倶楽部』『婦女界』の調査を元に考察した。また、百貨店はそれらをどのように一般の消費者に供給したのかを、三越百貨店の事例を中心として、明らかにした。

---

\*1) kleosavas@gmail.com

## 配当決定額

|          |             |
|----------|-------------|
| 平成 23 年度 | 500,000 円   |
| 平成 24 年度 | 500,000 円   |
| 合計       | 1,000,000 円 |

## 研究の目的

モダン着物は、近年その存在が海外でも注目されており、収蔵品の整備・紹介が進んでいる。しかし、日本国内においては、特にアカデミックな視点からの研究はそれほど進んでいないと言ってよい。そこで、国内外で収蔵されているモダン着物のリストを作成し、今後のモダン着物研究の基盤作りをすることを、本研究の目的の一つとする。

モダン柄着物の着装や作法については、これまでの研究においては、髪型や化粧の流行の変遷、礼法の変容など、個別になされていたものであった。本研究では、それらの個別の研究蓄積を、モダン柄着物の流行とともに社会における受容の側からもとらえなおし、再統合する試みである。

また、20 世紀初頭、ファッションにおけるアール・ヌーヴォーの流行を牽引した三越は、モダン着物の流行の発信源の一つとして看過できない存在である。専属デザイナーを擁した三越が発表する、新しくモダンなデザインは、同社の PR 誌『三越』にも数多く見受けられる。本研究では、1900 年代末から 1930 年代前半までのこれらの PR 誌を調査することによって、百貨店である三越が、モダン着物の流行をもたらしたことを明らかにし、『三越』におけるモダン着物の隆盛期および対象とする年齢層の特定を試みる。

## 研究の方法

モダン着物の現物については、日本国内では文化学園服飾博物館の内覧、国外ではイギリスの National Museums Scotland の内覧で、所蔵品を調査し、データベース作りを行った。

着装と作法の変容については、着用者の女性にとって、着物についての情報をもたらす身近な存在としての婦人雑誌及びその附録を中心に記事を検証した。当該期は多種の婦人雑誌が刊行された時期であるが、その中から『婦女界』(婦女界社、1910 年創刊)と『婦人倶楽部』(大日本雄弁会講談社、1920 年創刊)の掲載記事について検討した。該当二誌は、総合雑誌としての婦人雑誌のなかでも、服飾記事が比較的多く掲載され、また、その内容と後述する附録との比較検討ができるために取り上げたものである。その他、ワンテーマ・マガジンとしての婦人雑誌付録については上記二誌のほか、『主婦之友』(主婦之友社)、数は少ないが、『婦人世界』(実業之日本社)、『婦人公論』(中央公論社)などをも検討した。こうした婦人雑誌や、とりわけその附録は、現在図書館に配架されているものは非常に少ない。主に本誌記事についてはお茶の水図書館(財団法人石川文化事業財団)にて調査し、附録については個人所蔵のものを使用し検討した。

モダン着物をめぐる百貨店の販売活動については、百貨店三越百貨店の月刊 PR 誌『みつこしタイムス』(1903-1914)の第 6 巻 9 号(1908(明治 41)年 9 月)、10-12 号、第 7 巻 1 号から第 12 巻 4 号(1914(大正 3)年 4 月)、『三越』(1911-不明)の第 1 巻(1911(明治 44)年)から第 23 巻(1933(昭和 8)年)までを、文化学園図書館、株式会社 三越伊勢丹ホールディングス資料室、および近代文学館にて、1924(大正 13)年に通信販売用に創刊されたカタログ誌『三越カタログ』(1924-)の第 1 号(1924(大正 13)年

3月)から第140号(1937(昭和12)年4月)およびPR誌『大阪の三越』(1925-不明)を同資料室にて調査し、三越百貨店が仕掛けたモダン着物の流行の展開について、具体的な時期の特定や対象とする年齢層を探った。また、同資料室に保管されている図案集やサンプル生地集なども調査し、どのような図案や生地がモダンとして取り上げられていたかも確認し、収集した。それらの資料をもとに、流行を仕掛ける立場にあった三越百貨店が、モダン着物をどのように位置づけ、提案していたのかを考察した。

## 研究の実施計画

モダン着物の現物については、23年度は、文化学園服飾博物館及びその他の博物館収蔵品についてのデータベースを作成し、モダン着物のモチーフと型の特徴について明らかにする。服飾博物館では、本調査に先立って、9月末に館内データベースの閲覧及び収蔵品観覧についてのミーティングを予定している。24年度は、山田の英国滞在中に、Victoria & Albert Museum に所蔵されているモダン着物及びデザインソース集のデータ収集を行う。日本への一時帰国時(9月～10月)には、半田とともに三越資料室での調査を継続し、さらに高島屋資料館でも追加調査を予定している。

着装と作法の変容の研究計画としては、23年度は『婦人倶楽部』本誌記事の収集およびそれらについての言説・図版検証、婦人雑誌付録の検討を行う。『婦人倶楽部』はお茶の水図書館にて調査し、婦人雑誌付録については個人蔵のものを検討する。24年度は同じくお茶の水図書館にて『婦女界』本誌の資料調査およびそれらの記事と付録の比較を行った。また、日本女性学研究会近代女性史分科会にて報告(2012年4月5日、ウイングス京都にて)し、広く意見を求める。その結果を受けて、第39回日本生活学会大会(2012年6月4日、大阪大学中之島センター)で研究報告を行う。

三越百貨店の調査は、23年度の研究計画遂行中に新たに立ち上がった計画である。24年度の6月または7月には、昨年度、『三越』の調査を行った三越資料室にて、図案集の調査を予定している。(交通費・滞在費)三越資料室には、図案集が百冊以上残されており、調査には膨大な時間を要するため、数度にわたる調査を必要とする。これらを調査し、PR誌との関連から三越がいかんにしてモダン着物の流行をもたらしたのかを明らかにしたい。三越の専属デザイナーであった杉浦非水の図版は、残念ながら三越資料室には残されていないことが明らかになったため、アド・ミュージアムでの調査も検討している。(交通費・滞在費)。9月のシンポジウムの打ち合わせもあるため、本年度前半は、上記の調査含め、数度の出張を予定している。以上の調査は、9月のシンポジウムにおいて報告する。(交通費・滞在費)10月以降は、シンポジウムで指摘を受けた点や、9月まででは間に合わなかった点の調査を継続して行いたい。

## 研究の成果

### 1. モダン着物の現物について

23年度は、文化学園服飾博物館内のデータベース調査を行い、その中から13点のモダン着物の画像を得た。さらにその中で、状態によって特別観覧が可能とされた7点について現物調査を行い、その結果を以下の表にまとめた。なお、高島屋資料館および松坂屋美術館にも調査依頼を出したが、いずれもモダン着物の現物は所蔵していないとのことだった。

Table 1 Collection from the Bunka Gakuen Costume Museum. 文化学園服飾博物館収蔵品リスト。

|   |  |
|---|--|
| 1 | ①カテゴリー:長着②仕立て:袷③年代:大正④素材:絹⑤色:紫(表地)、紅絹・うぐいす(裏地)⑥柄:織、黒・橙・黄のライン⑦寸法:150cm(丈)、61.5cm(衿)、62.0cm(袖丈)⑧対象年齢:娘⑨状態:良、やや日焼け⑩その他:腰当なし、普段着 |
|---|--|

|   |  |
|---|--|
| 2 | ①長着②単衣③20 世紀前半④麻?⑤薄鼠、紫⑥矢絣(プリント)⑦141.8cm(丈)、61.5cm(衿)、45cm(袖丈)⑧娘⑨全体的に良⑩元禄袖、腰当なし、銘仙風のにじんだ矢絣模様がプリント技術で再現されている、近代を体現するかのような単衣である |
| 3 | ①長着②袷③大正～昭和初期④銘仙(表地)、木綿(裏地)⑤群青・淡黄・淡橙(表地)、生成・浅黄(裏地)⑥縞柄のダイヤ⑦141cm(丈)、61.4cm(衿)、63.6cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし                             |
| 4 | ①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、木綿(裏地)⑤こげ茶・薄茶・薄桃(表地)、生成・青(裏地)⑥縦縞、縞模様⑦140.7cm(丈)、60cm(衿)、63.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし、普段着                            |
| 5 | ①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、絹(裏地)⑤からし・黄緑・黒・青緑・濃ローズ・ローズ(表地)、濃ローズ・桜(裏地)⑥牡丹?⑦146.7cm(丈)、61.5cm(衿)、49.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩袖に丸みあり、腰当なし、普段着          |
| 6 | ①長着②袷③昭和初期④銘仙(表地)、紅絹・絹(裏地)⑤くすんだ赤・青・黄・白(表地)、淡橙(裏地)⑥藤⑦146.5cm(丈)、62.3cm(衿)、47.7cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩腰当なし、普段着                             |
| 7 | ①長着②単衣③昭和初期④銘仙、白絹(当て布)⑤淡ローズ、ローズ、すみれ、黄⑥百合?小花⑦150.3cm(丈)、64cm(衿)、75.6cm(袖丈)⑧娘⑨良⑩袖に丸み、腰当あり、奥行きのある柄にグラフィックプリントの影響が感じられる          |

24 年度は、イギリスの National Museums Scotland にて、大正・昭和期に製作された着物の現物調査を行った。また、Victoria & Albert Museum のデータベース調査を行い、6 点のモダン着物及びモダン柄道行の画像、またデザインサンプル集の画像を得た。その現物調査を予定していたが、Fashion & Textile 部門収蔵品が現在全て閲覧不可(Olympia の分館への引き継ぎのため、2013 年 6 月まで)だったため、叶わなかった。これは、来年度以降の課題となった。さらに、British Museum のデータベース調査も同時に進め、433 点の収蔵品の着物のうち、モダン着物の画像を収集した。一方で、着物のパターンをめぐる東西の往還という視点から、日本の着物の型紙調査を University of Glasgow Archives にて行った。その結果、1871 年から 2006 年まで存在した Scotland のカーペット会社 Stoddard International Plc.で所蔵されていた 4 点の使用済み型紙と 32 点の型紙のデザインサンプル(?)を得た。また、同社の 1936 年-37 年のカーペットカタログに、型紙のデザインを応用したと思しき、モダン柄のカーペットを発見した。

Table2 Collection from the National Museums Scotland. National Museums Scotland 収蔵品リスト。

|   |  |   |
|---|--|---|
| 1 | ①長着②単衣③大正・昭和④銘仙⑤青・黄⑥格子絣⑦63cm(衿)⑧娘⑨良、しみあり⑩普段着 |  |
| 2 | ①長着②単衣③大正・昭和④木綿?⑤白・赤・青・緑・黒⑥笹⑦不明⑧娘⑨良⑩普段着      |  |

|   |  |   |
|---|--|---|
| 3 | ①長着②袷③1920年代④絹(表地・裏地)⑤青・白・黄・赤・緑<br>⑥白波⑦不明⑧娘⑨良⑩丈長 |  |
|---|--|---|

## 2. モダン着物の着装と作法の変容について

婦人雑誌およびその附録の資料調査を行った。当該期の婦人雑誌には、女性読者へ向けたさまざまな記事が掲載されているが、その記事のなかから着物に関するもの、化粧・髪型に関するもの、作法・マナーに関するものを中心に調査した。また、本誌とは独立した形で発行されている附録は、当該期に発行部数を競う雑誌でよく取り入れられたものであり、ページ数に制限のある本誌よりも、内容が具体的であることが特徴だ。文章による説明だけでなく、挿絵やグラビアで示され、読者にわかりやすく示されている。

本研究のために調査したのは、1920(大正9)年から1935年までの期間である(附録については1921年から1934年までのものを16点、ほぼ各年に1点以上相当)。本誌については、先にも述べたとおり『婦人倶楽部』と『婦女界』を図書館に所蔵されている全誌を通じて調査した。上記二誌を選択した理由は、すでにある個人所蔵の附録に多いこと(『婦人倶楽部』8点、『婦女界』4点)、本誌に比較的服飾記事が多いことと、また記事内で紹介されている着物(商品含む)が、百貨店製造販売のものが多く、『三越』との比較がより鮮明になると考えてのことである(比較としてよりモダン柄着物が着用者の裾野を広げた30年代の『主婦之友』を参照したが、紹介品の価格帯が異なるため、上記二誌に絞って検討した。いずれは『主婦之友』をはじめとする他紙との比較・検討も今後の課題としたい)。図書館での調査は、23年度に当該期間の『婦人倶楽部』を、24年度に『婦女界』記事を調査した。

このテーマでの先行研究としては、高橋晴子の一連の研究がもっとも大きく、また広い範囲をまとめているものと言える[高橋、2005, 2007]。高橋は「身装」という概念を打ち出し、それが文化的環境にまで与える影響を考えねばならないとし、多方面に渡る資料から近代日本における装いについてのトピックを論じている。本研究は、この高橋身装研究に依拠しつつも、モダン着物とその着用者である女性に注目し、より着用者女性に近い存在としての婦人雑誌とその附録を主な資料として用いることとした。

さて、近代日本においては、着物だけでなく、髪型や化粧・着付けや服飾小物にも絶え間なく変化が訪れていた。それは単なる流行というだけでなく、大きな意味での女性風俗の変化に基づくものであったと言ってよい。なぜなら、表層的な意味での変化というだけでなく、西洋医学の到来による衛生観念の近代化や、近代教育の導入は、女性身体とそれをめぐる意識に大きな改革を余儀なくした。それは、“女性存在”をどう教育するのか、どのような女性像を創造するのかという点からの女子教育、また、体育という教科や運動の導入は女性身体を変革せねばならないという圧力をももたらしたからである。とはいえ、そのような圧力はそれまでの女性観を簡単には変革するには至らず、女性の服装に取り入れられる新しい技術やスタイルについて、その美醜や善悪が論議されたのであった。本研究では、新しい文様、新しい美を提案するモダン柄着物とともに、その着用とそれによって出来上がるイメージにまつわる議論を検討した。

明治以来もっとも女性の身なりにおいて多く論じられたもののひとつに髪型の問題がある。日本髪と束髪、ひいては洋髪や断髪の問題である。当該期では、すでに束髪は一つのスタイルとして確立しており、

関東大震災によってそれがさらに進められたことが記事から伺えた[一例として山野千枝子, 1923]。変わりゆく髪型に対応するように、着物の着付けにも、従来の日本髪だけでなく束髪や洋髪に似合う着付けが示される。大意としては日本髪には衿を横長に、洋髪ときには縦長を意識して作ると良いという。一方、束髪・洋髪が進んで断髪が登場すると、和装時に断髪でもおかしくないよう髷を使うようにというアドバイスも出てくる。これは、和洋装両方を日常から着用する人へ向けた指南であり、若い世代に多いとされた。

他方で、新しい図案の着物を着用するにあたって、着用者がそれまでの島田髷や丸髷のままでは調和しないとも注意される[一例として瑠璃子, 1925]。そして同じように、和装の典型である日本髪結髪時に、洋装の化粧法などを取入れすぎることはおかしいとたしなめられた。こうした注意は細部にわたり、着物の上にかけるショールや、手袋、ハンドバッグ、腕時計など服飾小物に関してまで読者の女性たちに、してよいこと(した方がよいこと)／してはならないこと(しない方がよいこと)が示されたのであった。

こうした女性たちの試行錯誤する姿にたいし、婦人雑誌記事には状況分析の声や疑問、警戒、揶揄も投げかけられている。なぜ、女性たちの服装が派手になったのかという(男性)漫画家の疑問や、断髪したがる若い女性(女学生)たちへの教育者からの批判等である。その理由として、着物へ洋装の影響が大きいことと、社会において新しい価値観が台頭してきていること、また女性たちがそのようなものをよいと感じていることなどが挙げられた。

実際、着物にそれまで取り入れられなかった色や柄(バラやチューリップ等の洋花、洋風の文様)を用い、その新しく見える着物が女性たちに着用されれば、女性たちの新しい着物姿のイメージが形成され得る。しかもそれに合わせて女性自身の髪型や化粧、もしくは立ち居振る舞いまで大なり小なり変化を及ぼしたとなれば、それは着物柄自体の一つの「ケバケバしい」変化ではなく、社会全体に—社会の構成要員としての女性像を変容させたとして—少なからぬ影響を与えたものであると考えてよい。モダンな柄の着物から、着用した女性たちが社会に与えた驚きは(多少の違和感を伴うものであったとしても)1920~30年代の日本社会の一側面に欠かせぬ事象であったと考えるべきであろう。モダン柄着物とは、日本人が着物を日常着として着用した時期における最後の流行を越えた、大きな意味での女性風俗の変化の一つを担ったものと考察できた。

### 3. 三越百貨店について

三越百貨店は、1911(明治 44)年から月刊 PR 誌『三越』を発行し、1924(大正 13)年には、PR 誌とは別に『三越カタログ』を創刊した。1927(昭和 2)年には、日本初のファッションショーを三越ホール(現在の三越劇場(日本橋))にて行っている。これは、一般に募集を呼び掛け寄せられた着物図案の中から入選作を選び、意匠部が仕立てて、女優に着用させて舞踊として見せるという形式で行われたという。このように、単に商品を販売するだけでなく、流行を自ら仕掛けていった三越の戦略は、モダン着物の流行を考える上でも大変重要な意味を持つと考えられる。

既に三越の資料を十分に検討し、論文や『趣味の誕生』も出版している神野由紀は、自身の論文「明治末期における『趣味』の受容」において、1905(明治 38)年から、尾崎紅葉などの知識人らから結成された「流行研究会(通称・流行会)」の存在などを例に挙げ、三越が流行を仕掛けていたことを論証している。1927(昭和 2)年の『三越』においても、「さて従来春秋の二回、當店に於きましては、流行の先驅たる基調色なるものを選定し、之を各機業地に送つて、製品に應用する事を提唱してまゐりました。その結果、市場に現れる實品は殆んどすべて當店主唱の基調色を帯び、我が服装界を風靡する状態でございます。」(「新春の流行—基調色と生地」『三越』第 17 卷、第 10 号(昭和 2 年 1 月)頁数不明)とあり、神

野の考察を裏付ける記述がある。この記述は、PR 誌の自社について述べている記事であり、客観的な記述とはいえないが、PR 誌において明らかに事実と異なることを書くことは考えられないことから、当時の三越百貨店が世間の流行を仕掛ける側に位置していたことは確かであろう。

本研究では、その三越百貨店が、モダン柄の着物をどのように展開していたのかについて、その隆盛期を特定した。また、三越がモダン調のものを売る際に対象とした女性の年齢層は、主に 22、3 歳頃から 27、8 歳頃までの令嬢や婦人であったことも調査から明らかになった。

中山千代の『日本婦人洋装史』によれば、モダン、とりわけモダンガールという言葉自体は、大正末頃からすでに欧米諸国の文化を記述する際などに使われることはあったが、日本女性に対しても広く使われ始めたのは、昭和に入ってからだという。(385-399 頁) 本研究の調査でも、PR 誌『三越』において初めてモダンという言葉が使われるようになったのは、1927(昭和 2)年であることが明らかとなった。例えば、1924(大正 13)年 10 月の『三越』第 14 巻、第 8 号では、「モヘヤ、シール、ベルベット」や「ショール」「舶来品」など明らかに西洋からのものではあっても、ここではまだ「モダン」という言葉は使われていない。(6 頁) また、その翌月、第 14 巻第 9 号においても、西洋の花である薔薇や百合の模様が流行しており、「ハイカラ向き」として紹介されているだけで、そこに「モダン」という言葉は登場していない。(6 頁) つまり、ハイカラ向きという言葉が、新しいもの、西洋的なものという意味を表しているのである。また、この頃の流行色としては、淡く華やかな色合いではあるが、色の名前には、「紅梅」「若草」「花藤」など日本古来の名前が使われていた。

しかし、1927(昭和 2)年になると、コバルトやグリーンレモン、ナイルグリーンなど英語をカタカナにした色の名前が用いられるようになり、生地も日本古来のものではなくなっている。実はこの基調色の紹介の際に、初めてモダン調について説明がなされたのである。その説明によれば、模様には時代調のものとモダン調のものがある。時代調のものは、純日本的な美を追求するもので、その中でもさらに現代らしさを取り入れるものであるのに対して、モダン調のものは、そもそも欧米の図案にヒントを得て、これに日本の趣味を適当に組みあわせて、時代の好みに合わせて作り上げるというものなのである。(「新春の流行—基調色と生地」『三越』第 17 巻、第 10 号(昭和 2 年 1 月)) そのようなものが、昭和に入ってからモダンという言葉とともに使われ、また提唱され始めた。また、同年翌月には、さらに「モダニズム染織品」というものも紹介されている。その説明によれば、モダニズム染織品とは、流行先端の中心地であるフランスのあらゆる工芸美術品の長所、特徴を採用し、これに日本の芸術の生粋と精髓とを合わせて現代の図案界に新たな面を開拓すると同時に、これを実際に実用化したもののことを指す。(「三越のモダニズム染織品」『三越』第 17 巻、第 2 号(昭和 2 年 2 月)、8-9 頁) 先のモダン調の説明とも重なるが、いずれにしても、フランスのモダニズム、すなわちアールヌーボーやアールデコ調のデザインに、日本独自のエッセンスを加えた図案のことをモダン調、あるいはモダニズム式などと呼んだのである。このように、『三越』におけるモダン、モダニズムという言葉は、1927(昭和 2)年から 3 年にかけて最も頻繁に使用されたが、1930 年代前半になると、着物の生地や帯の項で用いられる頻度が徐々に減少していった。1933(昭和 8)年 9 月の『三越カタログ』97 号においても「モダン好み」として用いられている例はあるが、「モダン家具」や「モダン鏡台」など、着物以外への使用頻度が高まった。このことから、モダン着物の流行は 1920 年代後半から 1930 年代前半にもっとも隆盛を極めていたといえるであろう。今和次郎の『考現学』によれば、1925 年初夏の調査では銀座の通りを歩く女性の 99% が和服姿だったという。(71 頁) そのため、着物にモダン調を取り入れることがごく自然な発想だったのだろうと推測されるが、その後 1930 年代半ば以降、ゆるやか

な洋装化の動きとともに、和服にモダン調を取り入れるスタイルが衰退していったのか、あるいは一部定着したためにモダンと呼ばれることがなくなったのか、今後の課題として検討したい。

#### 4. シンポジウムの開催

2012年9月29日に、これまでの研究成果の発表の場として、シンポジウム「着物？キモノ？KIMONO？おしゃれのモダン化と百貨店ー着物をめぐる、デザインと着装の東西交流ー」を開催した。当日はゲストコメンテーターに、高島屋の史料館担当主席調査員、廣田元氏をお招きして、高島屋史料館所蔵の貴重なモダン関連史料のご紹介と解説を頂いた。当日はほぼ満席の状態、活発な質疑応答もあり、非常に充実したシンポジウムとなった。



#### 主な発表論文等

[学会発表]

小山有子「大正・昭和初期におけるモダン着物と着装・マナーの変容—婦人雑誌付録を中心に—」第39回日本生活学会大会研究発表 2012年6月4日、大阪大学中之島センター

[口頭発表]

山田晃子・小山有子・半田幸子・廣田元「シンポジウム 着物？キモノ？KIMONO？おしゃれのモダン化と百貨店ー着物をめぐる、デザインと着装の東西交流ー」2012年9月29日、文化学園大学文化ファッション研究機構

#### 参考文献

1. 高橋晴子『近代日本の身装文化「身体と装い」の文化変容』(p.9), 三元社(2005)
2. 高橋晴子『年表 近代日本の身装文化』, 三元社(2007)
3. 山野千枝子「この頃流行の束髪のいろいろ」『婦女界』1923年9月号(p.240)ほか
4. 瑠璃子「流行の春着と丸帯」『婦女界』1925年1月号、p.267ほか
5. 青木美保子:「大正・昭和初期の着物図案に見られるヨーロッパの芸術思潮の影響」, 神戸ファッション造形大学短期大学部研究紀要, Vol.33, pp.1-15 (2009)
6. 今和次郎: 考現学——今和次郎集 第一巻, ドメス出版 (1971)
7. 神野由紀: 趣味の誕生——百貨店が作ったテイスト, 勁草書房 (1994)
8. 神野由紀:「明治末期における『趣味』の受容——デザイン・メディアとしての三越呉服店の考察」, 江戸川女子短期大学紀要, Vol.9, pp. 49-60 (1994)
9. 中山千代: 日本婦人洋装史(新装版), 吉川弘文館(2010, 初版:1987)
10. 初田亨、村島正彦:「明治大正期の三越百貨店の広告・文化事業と建築——都市における繁華街の建築に関する歴史的研究(その6)」, 研究報告集・計画系, Vol.62, 社団法人日本建築学会,

pp.273-276 (1992)

11. 三越, Vol. 1-23 (1911.3-1933.4)

12. 和田博文: 資生堂という文化装置 1872-1945, 岩波書店 (2011)